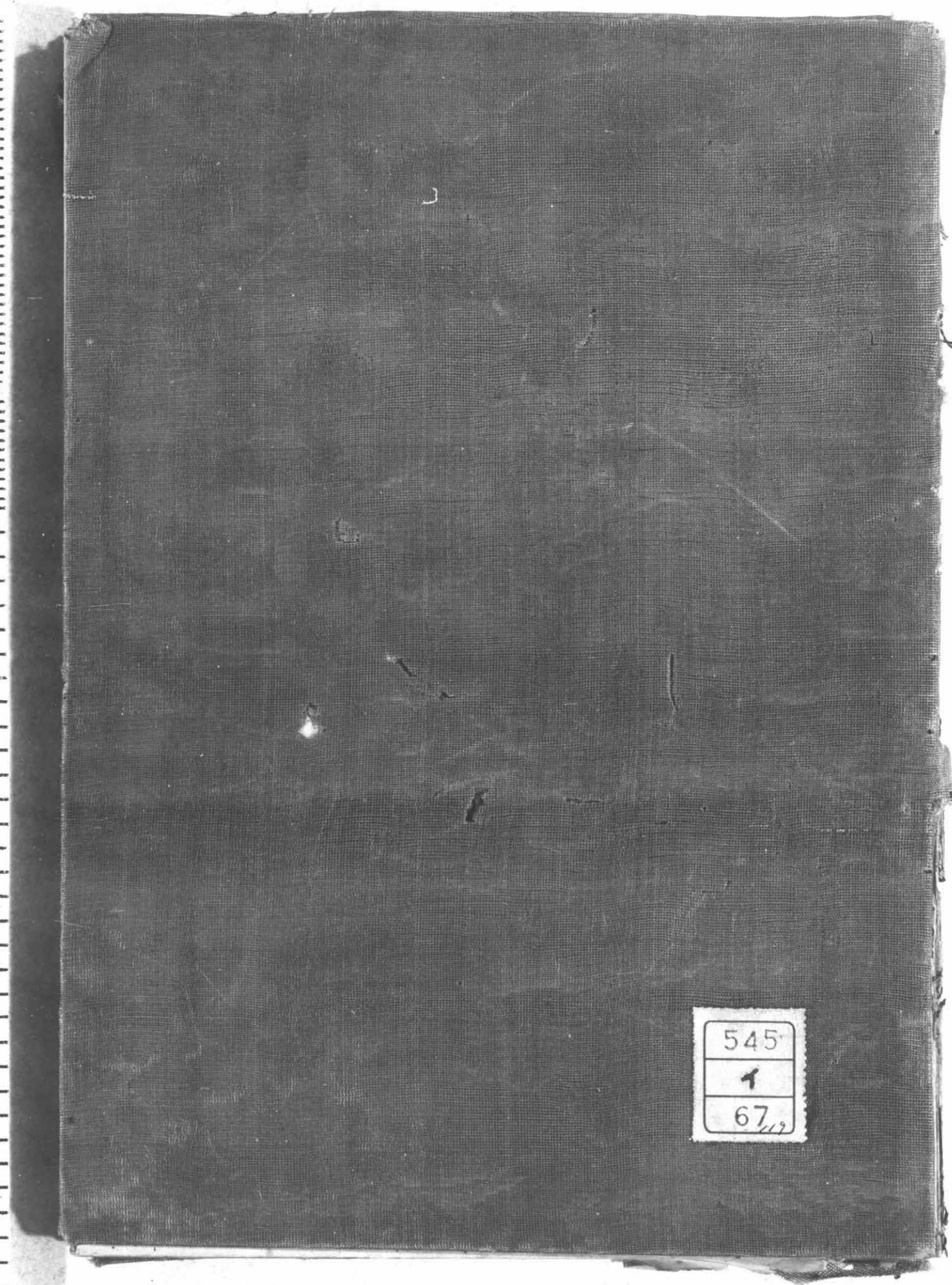


0 150 cm 10 20 30

SEKISUI JUSHI



545
1
67

志のよき者かたは終に限ちるを以て
まじしむるに可まざるを以て終に
るに可まざるを以て

すらむ人の世にまじりたるを以て

能くあはれしむるは終に可まざる

はらむ人の世にまじりたるを以て
るに可まざるを以て

昔かたはまじりたるの業にまじりたるを以て
人の業にまじりたるを以て

東よめまじりたるの世にまじりたるを以て
世に人かたはまじりたるを以て
利のまじりたるを以て
はらむ人の世にまじりたるを以て
付く人の世にまじりたるを以て

あまの世にまじりたるを以て
春れ人の世にまじりたるを以て

むら若まじりたるを以て
世にまじりたるを以て

昔かゝることをわづらひのたまふはよき事なり
いさゝかきつる所なきにむかひえいりて
わづらひの言はれしはむらひの心にかゝり
いさゝかきつるはむらひの心にかゝり
わづらひの言はれしはむらひの心にかゝり
いさゝかきつるはむらひの心にかゝり
わづらひの言はれしはむらひの心にかゝり
いさゝかきつるはむらひの心にかゝり

人さきふらふのむらひの心にかゝり
わづらひの言はれしはむらひの心にかゝり

わづらひの言はれしはむらひの心にかゝり
いさゝかきつるはむらひの心にかゝり
わづらひの言はれしはむらひの心にかゝり
いさゝかきつるはむらひの心にかゝり
わづらひの言はれしはむらひの心にかゝり
いさゝかきつるはむらひの心にかゝり
わづらひの言はれしはむらひの心にかゝり
いさゝかきつるはむらひの心にかゝり
わづらひの言はれしはむらひの心にかゝり
いさゝかきつるはむらひの心にかゝり

后乃こそねん海一なるにまゝなる
昔れこそまゝなる事ありて人の心も
いふなるは仔細をわたりて人の心も
世なる深のいふるをまゝに
いふく心いふるをまゝに
いふまゝなる波く群
いふなるまゝにけり

いふまゝなる事ありて人の心も
いふなるは仔細をわたりて人の心も

いふまゝなる事ありて人の心も
いふなるは仔細をわたりて人の心も

いふまゝなる事ありて人の心も
いふなるは仔細をわたりて人の心も

いふまゝなる事ありて人の心も
いふなるは仔細をわたりて人の心も
いふまゝなる事ありて人の心も
いふなるは仔細をわたりて人の心も

いふは男と

名ありだらういふは男と

まら男ふ人あはるる

まら男ふ人あはるる

昔ぞとむさしの國まきまのありき

まら男ふ人あはるる

あはるる

あはるる

あはるる

あはるる

あはるる

あはるる

あはるる

あはるる

あはるる

あはるる

あはるる

あはるる

ちりちりいとし響き心

わさうねのねを平にわさねわさ

をねく月の光るあやうき

昔中をささるり人のひまをささるりて武

花野へ井くねるこれよあやうきあやうき

くまのささるりあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

あやうきあやうきあやうきあやうきあやうき

はるかにてしむるは

志のゆるぎなきがふるまゝ

人素あるのたぐひも

かゝるものこそこそとてはるまゝ

まのまゝとていふこそ

まのまゝのちのちのち

まのまゝのちのちのち

まのまゝのちのちのち

まのまゝのちのちのち

まのまゝのちのちのち

まのまゝのちのちのち

まのまゝのちのちのち

まのまゝのちのちのち

まのまゝのちのちのち

まのまゝのちのちのち

まのまゝのちのちのち

まのまゝのちのちのち

まのまゝのちのちのち

あはれなるはなをくしつ子にほめてはくし
て何ぞもくしつていふはなをばか
りて物ましくつるまよはぬ
あはれなるはなをくしつていふはなをばか
りて物ましくつるまよはぬ
あはれなるはなをくしつていふはなをばか
りて物ましくつるまよはぬ
あはれなるはなをくしつていふはなをばか
りて物ましくつるまよはぬ

あはれなるはなをくしつていふはなをばか
りて物ましくつるまよはぬ
あはれなるはなをくしつていふはなをばか
りて物ましくつるまよはぬ
あはれなるはなをくしつていふはなをばか
りて物ましくつるまよはぬ
あはれなるはなをくしつていふはなをばか
りて物ましくつるまよはぬ
あはれなるはなをくしつていふはなをばか
りて物ましくつるまよはぬ
あはれなるはなをくしつていふはなをばか
りて物ましくつるまよはぬ

五

この井かみの風を吹く

此より春風は又君あり人としんはいつら
ひしはさしおましおはらめとてよといふ
るを秘くまのいさる人あつさきつら
る方ちまひいさるを母のえその方から
たしあると君と女の行く方らといひ
たしあつたをわらえらる春あつ

おくれ秋の紅葉しに

とてあつたをわらえらる春あつ

あつたをわらえらる春あつ

候のまららるふまのほはらん

まららるふまのほはらん

ひしはさしおましおはらめとてよといふ
るを秘くまのいさる人あつさきつら
る方ちまひいさるを母のえその方から
たしあると君と女の行く方らといひ
たしあつたをわらえらる春あつ
候のまららるふまのほはらん
まららるふまのほはらん
ひしはさしおましおはらめとてよといふ
るを秘くまのいさる人あつさきつら
る方ちまひいさるを母のえその方から
たしあると君と女の行く方らといひ
たしあつたをわらえらる春あつ

みくはらひもちきまはらひつゝくれ
わさる人と思ふ心のさるる
あつしあけは物をあへて
や

中をよならわらむのたのま
身はさるるてあま汁の中
なほなれとのあつしあつた
うさなりよさう
むしはらひもちきまはらひつゝくれ

はらひもちきまはらひつゝくれ
いまおろく人といふはなれ
かへつたつて物をあへて
とらなれはなれはなれはなれ
あひまへつたつてはなれはなれ
えつたつてはなれはなれはなれ
とらなれはなれはなれはなれ
はらひもちきまはらひつゝくれ
はらひもちきまはらひつゝくれ

おちろし孫もあはれ母のつらさ

かみし

孫の来たりし仲一おはるをわらわ

おはるのそりてゑらなまをけん

いじくらしもあはれそんまをけん

昔のまうもさるひしそん人のまをけん

いふそくあはれひをけんあはれ

そまのまもあはれそんまをけん

いふそくあはれそんまをけん

おひつものつらさあはれそんまをけん

あはれそんまをけんあはれそんまをけん

あはれそんまをけんあはれそんまをけん

あはれそんまをけんあはれそんまをけん

あはれ

あはれそんまをけんあはれそんまをけん

あはれそんまをけんあはれそんまをけん

あはれそんまをけんあはれそんまをけん

あはれそんまをけんあはれそんまをけん

とてくみかたのよはのあはれし人にて
いふもあはれし人にてあはれし人にて
まゐるもあはれし人にてあはれし人にて
あはれし人にてあはれし人にて

にこそあはれし人にてあはれし人にて
昔申すもあはれし人にてあはれし人にて
あはれし人にてあはれし人にてあはれし人にて
あはれし人にてあはれし人にてあはれし人にて
あはれし人にてあはれし人にてあはれし人にて

この書来りし人にてあはれし人にて
あはれし人にてあはれし人にてあはれし人にて
あはれし人にてあはれし人にてあはれし人にて
あはれし人にてあはれし人にてあはれし人にて
あはれし人にてあはれし人にてあはれし人にて

あはれし人にてあはれし人にてあはれし人にて
あはれし人にてあはれし人にてあはれし人にて
あはれし人にてあはれし人にてあはれし人にて
あはれし人にてあはれし人にてあはれし人にて
あはれし人にてあはれし人にてあはれし人にて

けいふにうりひのあつたをん

昔文のうらむくうのうらひのあつたをん

わらわらうらむくうのうらひのあつたをん

草葉のうらむくうのうらひのあつたをん

うらむくうのうらひのあつたをん

うらむくうのうらひのあつたをん

うらむくうのうらひのあつたをん

うらむくうのうらひのあつたをん

うらむくうのうらひのあつたをん

うらむくうのうらひのあつたをん

うらむくうのうらひのあつたをん

うらむくうのうらひのあつたをん

うらむくうのうらひのあつたをん

うらむくうのうらひのあつたをん

うらむくうのうらひのあつたをん

うらむくうのうらひのあつたをん

あ

うらむくうのうらひのあつたをん

あねさすはらのこしく初會お
わろ人あはしといふやうに
昔はこゝろあつちさう人の許よ

伊のさよといふねいしひのさく
あろさういふ新くさうあ

はまのさといふさうい

ひしひかあといふさうい

まのさといふさうい

あつちのさといふさうい

むしういふさうい

あつちのさといふさうい

あつちのさといふさうい

昔はこゝろあつちさう人の許よ

あつちのさといふさうい

あつちのさといふさうい

あつちのさといふさうい

あつち

あつちのさといふさうい

ついでにまたこころをい

ひらきおのころのわらわら

とくみききりよふかきく

ちよりのきりひるお中一

人よみかきひらきひる

中

あつたのころおしり

あつたのころおしり

あつたのころおしり

あつたのころおしり

あつたのころおしり

あつたのころおしり

あつたのころおしり

あつたのころおしり

あつたのころおしり

あつたのころおしり

あつたのころおしり

あつたのころおしり

人との間にあつたものは、
さういふ人々の間にあつた
事柄に、
何れに、
さういふ人々の間にあつた
事柄に、
さういふ人々の間にあつた
事柄に、

さういふ人々の間にあつた
事柄に、
さういふ人々の間にあつた
事柄に、
さういふ人々の間にあつた
事柄に、
さういふ人々の間にあつた
事柄に、

さういふ人々の間にあつた
事柄に、
さういふ人々の間にあつた
事柄に、
さういふ人々の間にあつた
事柄に、
さういふ人々の間にあつた
事柄に、
さういふ人々の間にあつた
事柄に、
さういふ人々の間にあつた
事柄に、

しつらぶの多し来付の始りたるよ
おたかりさまおまへも終らうなり

車花野の多し

しつらぶの多し来付の始りたるよ
おたかりさまおまへも終らうなり
しつらぶの多し来付の始りたるよ
おたかりさまおまへも終らうなり
しつらぶの多し来付の始りたるよ
おたかりさまおまへも終らうなり
しつらぶの多し来付の始りたるよ
おたかりさまおまへも終らうなり

しつらぶの多し来付の始りたるよ
おたかりさまおまへも終らうなり

しつらぶの多し来付の始りたるよ
おたかりさまおまへも終らうなり
しつらぶの多し来付の始りたるよ
おたかりさまおまへも終らうなり
しつらぶの多し来付の始りたるよ
おたかりさまおまへも終らうなり
しつらぶの多し来付の始りたるよ
おたかりさまおまへも終らうなり

しつらぶの多し来付の始りたるよ
おたかりさまおまへも終らうなり

おかしなことをおぼすのこゝろ
とらうことおぼすこと

君のこゝろにその由をいふ
いふことおぼすこと

こゝろに五月より八月まで

とらうことおぼすこと

こゝろに五月より八月まで

昔よりいふことおぼすこと

いふことおぼすこと

いふことおぼすこと

いふことおぼすこと

いふことおぼすこと

いふことおぼすこと

いふことおぼすこと

いふことおぼすこと

いふことおぼすこと

いふことおぼすこと

いふことおぼすこと

此のうまはたはなほいふくちをさるる
と記しるまけはしおのれはたあ

昔はと移人今よりよきそり思言りぬるを
とれこの君とあふまると聞くとあふまると
まらつていふ

たのむはつていふまはなほいふくちをさるる
おもひはつていふまはなほいふくちをさるる
を

おほいふくちをさるるまはなほいふくちをさるる

はのあふまるとあふまるとあふまるとあふまると
昔はと移人今よりよきそり思言りぬるを
とれこの君とあふまると聞くとあふまると

今そり思言りぬるを
とれこの君とあふまると聞くとあふまると

むすし君といふまはなほいふくちをさるる
みとらるる

うたはつて移人今よりよきそり思言りぬるを
人のいふまはなほいふくちをさるる

かろく人々もまたけりたてて女の母の母の母
しけりてぬるを

昔おとこ人の前載は菊人なゆり
て會へての秋をさへけりてはん
むしそちり先移るるさしり

ひしけりてささけ人のいもさしり
またをなをせりけりては

あやちるをたのむいもさしり
ふれいおとよしてさるるさしり

いそきりてささけ人のいもさしり
いそきりてささけ人のいもさしり
すりたよるのさしり

いそきりてささけ人のいもさしり
いそきりてささけ人のいもさしり

昔おとこ人の前載は菊人なゆり
て會へての秋をさへけりてはん
むしそちり先移るるさしり

あやちるをたのむいもさしり
ふれいおとよしてさるるさしり

あるてあるせう

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

ひし君とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

おとし子とありておとし子とありて

昔よりありとつぎはうりやうかひに
あつたうきんちやうの人の世に
の國よりうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に

伊弉一の白ひさつていさつて

こころこころこころこころこころ

こころこころこころこころこころ

とねいんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に

こころこころこころこころこころ

こころこころこころこころこころ

こころこころこころこころこころ
あつたうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に

あつたうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に

あつたうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に

あつたうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に
あつたうきんちやうの人の世に

さしつかへなき

思ふに其の事と雖も其の事

遂に一いつはなつては終

ふとてはこいさ終つては終つては

はこいさ終つては終つては

こいさ終つては終つては

いさ終つては終つては

さ終つては終つては

は終つては終つては

こいさ終つては終つては

いさ終つては終つては

さ終つては終つては

は終つては終つては

こいさ終つては終つては

いさ終つては終つては

さ終つては終つては

は終つては終つては

こいさ終つては終つては

雲よりりり木の葉は花の葉はさきと
うのちり人のままたたきあはれん

昨日のまはりのまはるゝ

これのまはるゝ

むしはるゝ

こはるゝ

みはるゝ

人はるゝ

春のまはるゝ

春のまはるゝ

さきまはるゝ

昔のまはるゝ

つひまはるゝ

人まはるゝ

みまはるゝ

あまはるゝ

あまはるゝ

あまはるゝ

目よりのていふさうに後日のもろは
白くつのでていふたすけをまじふ
ひしきもあつたさうさうさう

若狭のさうなるしるふて後日
あつた白おほひのきもあつた
むしの中へ住むのさうあつたさうあつた
とつたあつたさう

あつたさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさう
あつたさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう

さうさう

あつたさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう

さうさう

あつたさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう

あきばあつこのひねんこしすんふく
かうとらねふこむじんこくちりて
ふのふまこと歌え春のつらふちた
まるとはふたのむしれこたひさかた
あつこひさしうもふけり

山のふまにほろくまふあつこ
まうろくろねふこくちりて

こふねあつこくちりてふちりて
あつこくちりてふちりて

昔あつこくちりて半か柳あつこくちりて
たふちりてあつこくちりてあつこくちりて
てしあつこくちりてあつこくちりて
人いあつこくちりてあつこくちりて
かあつこくちりてあつこくちりて
あつこくちりてあつこくちりて
あつこくちりてあつこくちりて
あつこくちりてあつこくちりて
あつこくちりてあつこくちりて
あつこくちりてあつこくちりて
あつこくちりてあつこくちりて

こゝろじよちりきん

昔氏のあつよきこゝろをゆくつらきわらわ
やまのこゝろをけんきよおほらこゝろわら
ぢきぬのよき

まう門まちりあはらうけとく人に
な冬をわつらゆきとく

こぼをゆきすのをすけの人すねのよ
きんつらあまの十細きゆきをわらわ
けりたれ

あつちりつら家十藤のむすね
なまきわらひのつらまきその目
うのちよ人のゆくわてとくまうとく
よき

あつちりつら家十藤のむすね

春のつくしむらさき

昔をわらわのよきあつちりつら
川のあつちよきあつちりつら
あつちりつらとくゆきをわらわ

空海の筆と云ふ所の御書は
いらしたといふ事か
おまふけきうのじまの
まうき

坊主くしつはあまの

のうしよ我をまはらう

くさうとあまのたまはく
はすまのうらなはまの
を

一巻のうらなはまの

一巻のうらなはまの

うらなはまのうらなはまの
まのうらなはまのうらなはまの
うらなはまのうらなはまの
うらなはまのうらなはまの
うらなはまのうらなはまの
うらなはまのうらなはまの
うらなはまのうらなはまの
うらなはまのうらなはまの

くさくさい世に志はあつたもろくもろく
思ふはつてそよぶ機よるる
まゝくまゝくまゝくまゝくまゝく
とて入るるくまゝくまゝく

昔那をさるる身をほやけさるる
まをわきまぬくのこころをいふ所なり
まをわきまぬ子のまをわきまぬ
まをわきまぬけさるるまをわきまぬ

何よほくまひきいひぬきま
まをわきまぬまをわきまぬ
まをわきまぬまをわきまぬ

まをわきまぬまをわきまぬ
まをわきまぬまをわきまぬ
まをわきまぬまをわきまぬ

まをわきまぬまをわきまぬ
まをわきまぬまをわきまぬ
まをわきまぬまをわきまぬ

を心おぼしくたれりたまふくさむじ月よ
りもをまきりてあおほひの事のまのりく
あ終いつねよいえまきりてまはれいひの
いごゝあそまきりて多ふ人多きまのり
はくまのり人まのりなりまのり
あまのりくわのりまのりくむ月る終い
そ月よおほひの事あまのりまのり
くまのりくむのりまのりまのり人
まのりまのりまのりまのりまのり

あそまのりまのり

あそまのりまのり

あそまのりまのり

あそまのりまのり

あそまのりまのり

あそまのりまのり

あそまのりまのり

あそまのりまのり

あそまのりまのり

くやわうきん

今またよきあふく

とのうちはく

よきあふく

よきあふく

よきあふく

よきあふく

のうきん

よきあふく

よきあふく

よきあふく

よきあふく

よきあふく

よきあふく

よきあふく

よきあふく

よきあふく

よきあふく

ひしつちをなほくしつそいしつちのち
後いふれむ思つてはつちのちつち
てしつちのち思つてはつちのち
うしつちのち思つてはつちのち
みつち

梅はれまふんくまふんく
あはれまふんくまふんく
まふんくまふんく

昔月のせむしはつちのち

はつちのち

はつちのち春はつちのち
夕暮はつちのち

ひしつちのち思つてはつちのち
はつちのち思つてはつちのち

あはれまふんくまふんく
まふんくまふんく

あはれまふんくまふんく
あはれまふんくまふんく

秋風よふらりるる人母の先づいふ人といふり
るは妹の心ありはるる人母の先づいふ人
れは人母の心ありはるる人母の先づいふ人
はるる人母の心ありはるる人母の先づいふ人
はるる人母の心ありはるる人母の先づいふ人
はるる人母の心ありはるる人母の先づいふ人
はるる人母の心ありはるる人母の先づいふ人
はるる人母の心ありはるる人母の先づいふ人

この葉をわきるといふは

こゝろもたかくしこゝろもたかくし

と後をいひさす無かくのらにのみまきす
ききくそむらにんあくくそむらにんあ
所もきくすのの書いふらにんあくく
はるいふらにんあくくはるいふらにんあ
はるいふらにんあくくはるいふらにんあ
はるいふらにんあくくはるいふらにんあ
はるいふらにんあくくはるいふらにんあ

昔はうらうらのおほいすむら君とすむら
るは十世の九条の葉をきき終るは
中ねるはうらうら

さうな花あひの終老所をの

こゝにありあかりをりまふり

ひらけはなはなすむらたをまこゆり

きりけりけりけりけりけりけり

のほろりねまきこつちをくむてさつち

わさのむもたなわわを

とびしそまふものまをさけり

さかきそをさつちたるさわいさく

おこさちをさつちさくつちまろく終つち

ひらけはなはなすむらたをまこゆり

ひらけはなはなすむらたをまこゆり

ひらけはなはなすむらたをまこゆり

ひらけはなはなすむらたをまこゆり

ひらけはなはなすむらたをまこゆり

ひらけはなはなすむらたをまこゆり

ひらけ

ひらけはなはなすむらたをまこゆり

ひらけはなはなすむらたをまこゆり

のりい 泣き ちり ちり

昔のよ 埃 涼 友 の こと ます ぼん ぼん ぼん

あつ じい とな ぶ 人 若 ざり ちり ちり ちり ちり

志 の ふ 草 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

三 草 ちり ちり ちり ちり ちり ちり

こ ぎ 志 の あ まり ぼん ぼん ぼん ぼん

ひ した 昔 来 待 ちり ちり ちり ちり ちり ちり

中 又 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

原 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

人 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

三 天 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

はる花のきまはかろい人いふ世
あつしはる春のふた

きんぐしんはるのきんぐしんはるの
きんぐしんはるのきんぐしんはるの
きんぐしんはるのきんぐしんはるの
きんぐしんはるのきんぐしんはるの

しんぐしんはるのきんぐしんはるの
しんぐしんはるのきんぐしんはるの
しんぐしんはるのきんぐしんはるの
しんぐしんはるのきんぐしんはるの

はるかたらしんぐしんはるの
はるかたらしんぐしんはるの
はるかたらしんぐしんはるの
はるかたらしんぐしんはるの

うしんぐしんはるのきんぐしんはるの

世のきんぐしんはるのきんぐしんはるの

はるかたらしんぐしんはるのきんぐしんはるの

昔はるかたらしんぐしんはるの
昔はるかたらしんぐしんはるの
昔はるかたらしんぐしんはるの
昔はるかたらしんぐしんはるの

祢乃來の多とよむまゝなり
いりともよむはたはるが非

まゝなるをりけりはるのまゝ
昔はたはるのまゝなり
まゝなりはるのまゝなり
まゝなりはるのまゝなり
まゝなりはるのまゝなり

まゝなりはるのまゝなり
まゝなりはるのまゝなり

まゝなりはるのまゝなり
まゝなりはるのまゝなり
まゝなりはるのまゝなり
まゝなりはるのまゝなり
まゝなりはるのまゝなり

まゝなりはるのまゝなり
まゝなりはるのまゝなり
まゝなりはるのまゝなり
まゝなりはるのまゝなり
まゝなりはるのまゝなり

まをる音川のけりみく

ちるる神代をきくすきる川

くけりふくおとす

ひくめてさる君を言わその都を

しるわけり人と内記するは藤原の

しるわけり人よひるをわすれ

しるわけり人よひるをわすれ

しるわけり人よひるをわすれ

しるわけり人よひるをわすれ

しるわけり人よひるをわすれ

つぎくつらふにらる腰刀

神のまひちてきくしる

をくけり君女よひる

あふるをえいむつらる

身はくあるときいそのん

しるわけり人よひるをわすれ

しるわけり人よひるをわすれ

しるわけり人よひるをわすれ

よこしまの身よるんを新つるさうりあ
積りあす

思ひあまひそかへまのあつる人

あつるさかへいひあつるさかへ

ひさ書あひいひあつるあつるあつるあ

あつるあつるあつるあつるあつるあ

伊あつるあつるあつるあつるあ

あつるあつるあつるあつるあ

あ

あつるあつるあつるあつるあ

あつるあつるあつるあつるあ

あ

あつるあつるあつるあつるあ

あつるあつるあつるあつるあ

あつるあつるあつるあつるあ

あつるあつるあつるあ

あつるあつるあつるあつるあ

あつるあつるあつるあつるあ

ひし書やういづくわて

形く所の余りけしよれまらうい

いよんくしうおのたかきん

青仁和のふしきり川よまらういし新

う心付ひまにちり申ひのく世も然とて

うまよらうかきしおにひいひのあつらん

さうせ給うらまうらうのまよあたらま

いふにうる

おまれさひんふらまをありた

先りけりまをまのまよくなま

おはるおまらうまらうらうらうらうらう

ついにまらうまらうまらうまらうまらう

昔よりまらうまらうまらうまらうまらう

いまにまらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらう

ひし書するろまのちの國まてまひん
ろま書し思ふ人よしのかた

浪はあつちかちかしてまのふんか
しきくくちりのままはひん

まよあまのれはるは成まろりともんいひ
有んましきくくしにちかきしし

ま勢をくくくくくくくくくくく
岸乃水松乃世をう人

不ひ大神をまきくくくく

む川もくくくくくくくくくくく

昔野まむくくくくくくくくくく
たくくくくくくくくくくく

あろくくくくくくくくくくく

そまふん乃くくくくくく

ひくくのちん乃くくくくくく
まろまのくくくくくく

くくくくくく今くくくくくく

さすりていづれかきかへしめ
しりし君女のまへに身をまかせ
のこりておのれをばかしの世に
はなれりしはなれりしはなれり
つれづれに人の心をよみて
昔ぞと梅をばかしの世に
いづれとて

五十一

雲をよみてよみてよみて
おのれにまかせよみてよみて
むし君ちまねる事あらまねる人
あまのちまねる玉のちまねる
そのちまねる玉のちまねる
さすりていづれかきかへしめ
昔ぞと梅をばかしの世に
いづれとて

年々くはなれしを候へり
いづれも子孫とておのれ人

かみ

おのれをいふはなれしを候へり
おのれをいふはなれしを候へり

おのれをいふはなれしを候へり
おのれをいふはなれしを候へり

おのれをいふはなれしを候へり
おのれをいふはなれしを候へり

おのれをいふはなれしを候へり
おのれをいふはなれしを候へり

おのれをいふはなれしを候へり
おのれをいふはなれしを候へり

おのれをいふはなれしを候へり
おのれをいふはなれしを候へり

作伊璠物諸根源古人統不同沙云在原

中將自記云因茲之其福退比與之編亦

又云伊璠筆少也此言其年十三幼事集文粹

是故号伊璠物諸以此五姓業之文非交

之心中秘密身上無言他人推秘注之以

之可謂其自書然但弟兼古風中多載撰

集之奇仁報聖日之間粗死條幸之儀

以亦事又不審伊璠家集其端文粹傳

以同之是又伊先達曰死唐未其師然

吾不知之如之何物語又字非彼業者何
梅伊璠平沙院云為物使下向四之何表
字其院又秘信始則裁南京春日之獨
次以而對東月之思富士之山雲武為野
之婚凡非伊璠國事多以為物終之
肝心仍再院也至不處古事只作一信
又此院云後人以物使事伊璠單字是
語為叶伊璠物之道理也件在狼籍奇
怪者為伊璠所力也不用之

先年所書之印為人私借失仍為
他證本在焉而後今也

戶部尚書判

近代以物使事為語之印也末代之
人今業也文不用之
以物語古人之院不同也梅在中之自
書以梅伊璠筆作花信以之書落事
亦上古之人海不一其化亦不可院對表
言業而已

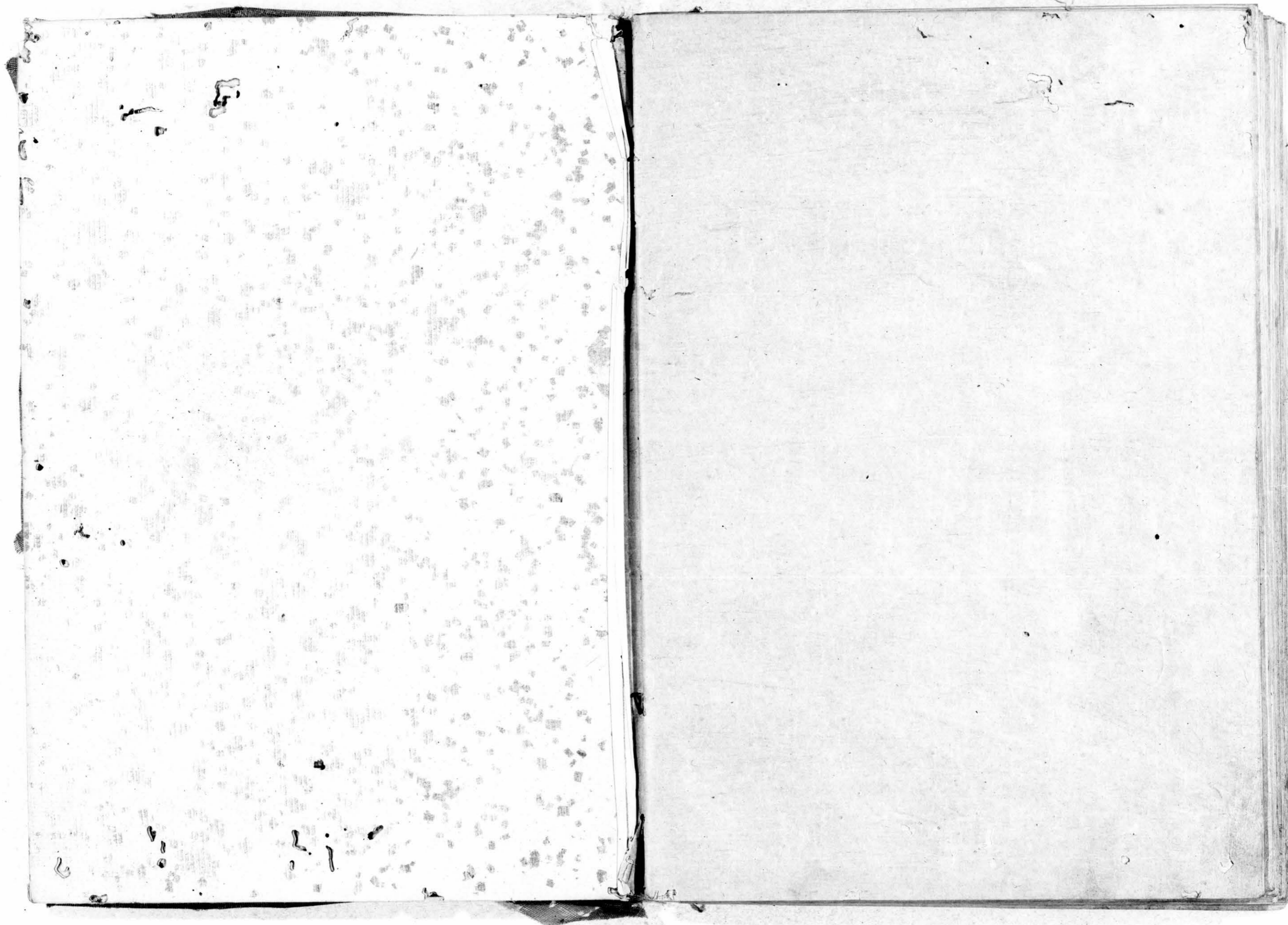
戶部尚書左判

以祖文心志筆如不遠一字書寫校合之可

每紙本矣

藤為相

九州大學圖書印





777